

ドイツ語・オランダ語話法助動詞と言語使用の三層モデル

Deutsche und niederländische Modalverben und das Drei-Schichten-Modell des Sprachgebrauchs

末松 淑美

SUEMATSU Yoshimi

「言語使用の三層モデル」では、話者を「公的自己」と「私的自己」の2つの側面に分け、さらに認知から言語化までのプロセスに「状況把握」「状況報告」「対人関係」という3つの層を設け、話者の認知的視点の違いを説明する。この三層の組み合わせと、話者の二側面、そして直示的中心の位置によって、さらに話者の認知的内面に深く入り込んで言語現象の違いを説明する。このモデルを利用した英語・日本語の話法の助動詞の分析を参考に、ドイツ語 müssen とオランダ語 moeten の言語使用のうち、意味の周辺領域で差異の認められるケースの分析を試みた。その結果、müssen に比べて moeten は、意味解釈のさい、「対人関係層」、つまり場面関与者の心理的・社会的関係により影響されるという傾向が見えた。また、話者の直示的中心に関しても、「公的自己」と「私的自己」のいずれかにあるのではなく、その中間地点もありうる可能性が見えてきた。

キーワード：話法の助動詞、三層モデル、モダリティ、müssen、moeten

1. はじめに

本稿の目的は、英語・日本語の言語表現における視点の違いを説明するために考案された「言語使用の三層モデル⁽¹⁾」が、同じゲルマン系言語であるドイツ語とオランダ語の話法の助動詞が持つ主観的な意味の差の説明にも応用できるかを検証することにある。このモデルの特徴の1つは、話者を「私的自己」と「公的自己」という2つの側面に区別して、話者が状況を把握してから発話するまでのプロセスを説明している点である。ラネカーの認知モデルでは、話者の立ち位置を変えることによって、話者の主観的・客観的視点の違いを段階的に表現していた。しかし、それは英語を基盤とした発想が元になっており、まったく構造の異なる日本語に関しては、説明しきれない部分⁽²⁾がある。「言語使用の三層モデル」では、話者を「私的」と「公的」という2つの側面に区別し、さらに認知から言語化までのプロセスにも3つの層を想定することにより、その三層の異なる組み合わせが英語・日本語の視点の相違を生み、それが言語表現にどのように現れているのかを説明している。話者の立ち位置の違いに加えて、認知の本質的な違いが焦点となる。

ドイツ語とオランダ語の話法の助動詞の対照研究においては、同語源で、近い意味であっても、実際の言語使用ではニュアンスの違いが確認されている。その

一例として、「義務・必然」という同じ中核的意味を持つドイツ語 müssen とオランダ語 moeten が挙げられる。moeten のほうが、müssen よりも幅広い場面で、そして強い必然性だけでなく、少し弱めの必然性（助言・アドバイスなど）、そして客観的な必然性だけでなく、主語の強い意志表示などでも使われることが分かっている。⁽³⁾

ラネカーの認知モデルでは、それぞれの発話状況で、話者自身を含めた関与者がどのように関わるのか、モダリティがどのような認知経路をたどって聞き手への働きかけとなるのかを視覚的に表すことはできる。しかし、モダリティの質、たとえば、必然性の強弱や、モダリティ源が客観的状況か主観的な人の意志（話者または文主語）に基づくのかななどをモデルに組み入れるのは難しい。人の意志を絡めたモダリティの質に特化したモデルを模索していた。⁽⁴⁾

このような背景から、「言語使用の三層モデル」を使って、müssen と moeten の必然性の質的な相違点を視覚的に表せるかを試みたい。第2節では、まず三層モデルの構造と考え方について紹介する。次に第3節では、三層モデルを利用して英語・日本語の話法の助動詞を分析している例を挙げる。第4節では、これまでに分かっているドイツ語 müssen とオランダ語 moeten の意味の違いを具体的な例文で説明し、その

後、分析を行う。第5節で結果と今後の課題をまとめる。

2. 言語使用の三層モデルの概要

「英語は公的自己中心の言語、日本語は私的自己中心の言語⁽⁵⁾」というのが、三層モデルを提唱している廣瀬幸生のモットーである。そして、それを説明するためのモデルが、図1および図2⁽⁶⁾である。前者が英語版、後者が日本語版である。話者が状況を認知し、それを言語化するプロセスを表現しており、英語と日本語で、そのプロセスが異なることを示している。

主な特徴は、次の2点である。

- ①話者(話し手=S)を、「私的自己」と「公的自己」の2つの側面に分けて考える。直示的中心がいずれの「自己」にあるかを区別する。
- ②話者が、状況を把握してから言語を使用するまでのプロセスに、「状況把握」「状況報告」「対人関係」という3つの層を想定する。

まず、「状況把握層」で状況を把握するのは「私的自己」である。そして、状況を認知して感じたことなどを言語を使って聞き手に伝達するのが「状況報告層」で、この担い手は「公的自己」である。そして、言語を使うさいに、聞き手(H)や他の関与者との人間関係に配慮して表現を選ぶのが「対人関係層」である。この自己の種類と3つの層との関係は変わらない。言語によって変化するのは、層の組み合わせ方、および直示的中心となる自己の種類である。直示的中心とは、話者の「今・ここ」を表すダイクシスの起点のことである。

英語では、私的自己が状況を把握し、一定の思いを形成するが、それは同時に公的自己によっても把握されている。そのため、そのまま公的自己の視点から聞き手に報告できる。必要に応じて、聞き手を含む関与者間の人間関係に配慮し、表現を変化させたり、別の語彙を補足したりする。

いっぽう日本語では、層の組み合わせが異なる。まず、話者が状況を把握すると、そのまま言語化することができる。聞き手(H)がいないので、ひとり言のような状態であるが、文としては成立する。その後、聞き手に伝達するためには、公的自己の視点から対人関係に配慮し、状況報告にふさわしい形に整えて、言語化するというプロセスをたどる。

「今日は金曜日だ」の例⁽⁷⁾をここに引用する。

- (1) 今日は金曜日だ。
- (2) 今日は金曜日だ {よ／です／でございます}。
- (3) Today is Friday.
- (4) Today is Friday, {madam / ma'am / Mrs. Brown / Jane / darling / honey / etc.}.

日本語では、カレンダーを見ながら例文(1)のように「今日は金曜日だ」と思ったり、口に出して言うことはある。しかし、会話で人に伝えるときには、例文(2)のように終助詞の「よ」などを付け加えたり、あるいは聞き手との人間関係によって丁寧さの加減を変えたりするのが一般的である。図2に照らして説明すれば、例文(1)は「状況把握層」で「私的自己」が把握した状況をそのまま言語化したもので、聞き手はいない状態であるが、日本語の文としては成立している。会話で聞き手に伝えるためには、「対人関係層」と「状況報告層」で聞き手との関係や状況を考慮して、適切な終助詞などを付け加えることになる。

いっぽう英語では、カレンダーを見ながら聞き手に向かって例文(3)のように Today is Friday. と言うことができる。対人関係を考慮して、呼びかけの言葉を添えてもよいが、必ずしも必要ではない。図1に照らして説明すれば、状況を把握しているのは「私的自己」であったとしても、「状況把握層」と「状況報告層」は一体化していて、そこには常に私的自己をメタ的に見ている「公的自己」が存在している。したがって、その「公的自己」の視点からそのまま聞き手に報告できる。必要であれば、対人関係に配慮した呼びかけや丁寧表現などを付け加えることができる。

例文(1)～(4)は、人の関わらない3人称主語の文であるが、1人称主語の文ではさらに違いがはっきりする。心理述語文の例⁽⁸⁾を挙げる。日本語では、自分については心理を断定できるが、他人についてはできない。

- (5) {ぼく／わたし} は、うれしい。
- (6) * {あなた／彼} は、うれしい。
- (7) I am happy.
- (8) [You are / He is] happy.

日本語では、例文(5)は言えるが、例文(6)は不自然である。2人称(聞き手)や3人称(他者)の心理を話者(=私的自己)は断定できないからである。

図1：公的自己中心の英語⁽⁶⁾

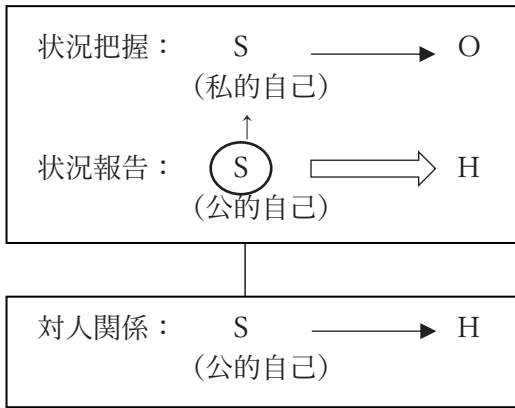
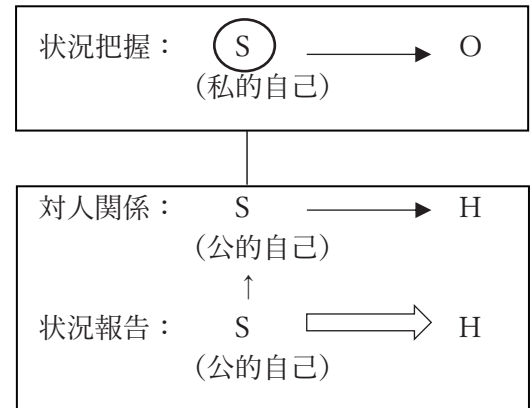


図2：私的自己中心の日本語⁽⁶⁾



S:話し手(主体) O:状況(客体) H:聞き手
 ───▶ :捉える ◻▶ :伝える ○ :無標の直示的中心

図3：和田(2017)の融合モデル(英語版)⁽⁹⁾

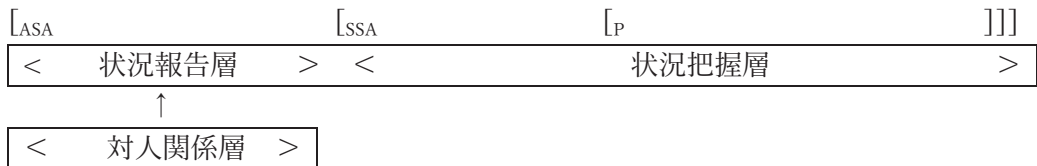
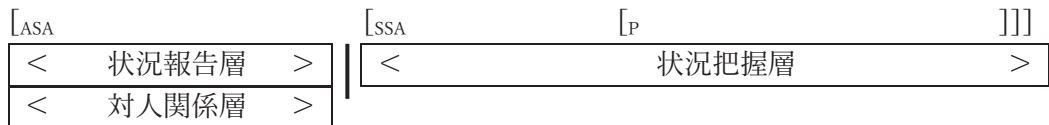


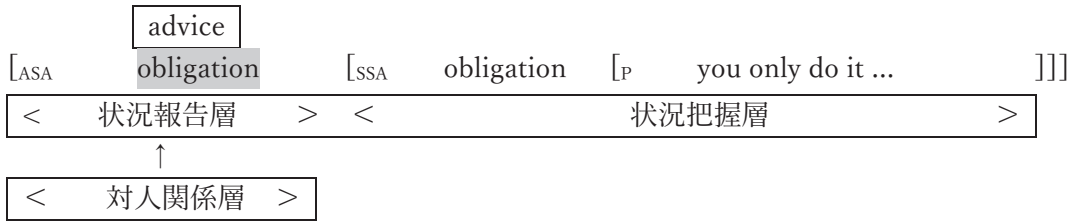
図4：和田(2017)の融合モデル(日本語版)⁽⁹⁾



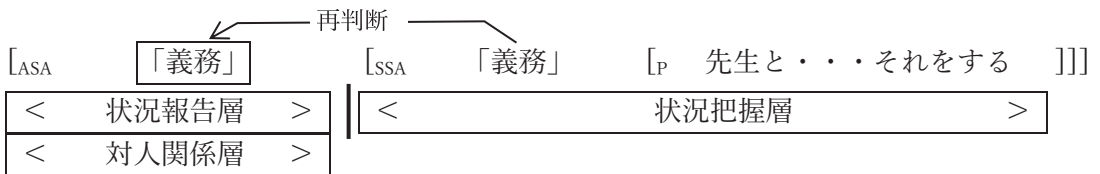
ASA = 聞き手志向の話者の心的態度 (Addressee-Oriented Speaker's Mental Attitude)
 SSA = 状況志向の話者の心的態度 (Situation-Oriented Speaker's Mental Attitude)
 P = 命題内容 (Propositional Content)

図5：must の分析例 ⁽¹⁵⁾

例文1：You must only do it with your teacher, because you can so easily get into the wrong. [advice]



例文2：(あなたは) 先生と一緒にときだけそれをしなければならない。[義務]



例文3：(あなたは) 先生と一緒にときだけそれをするのがいい。[助言]

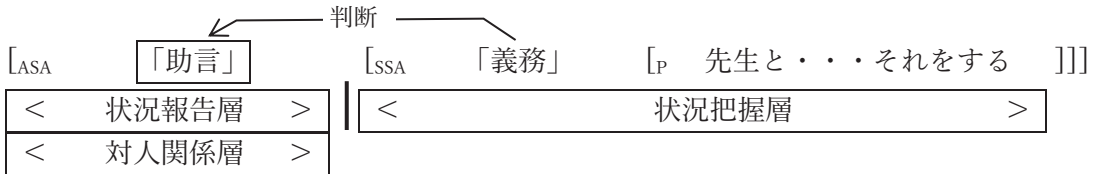
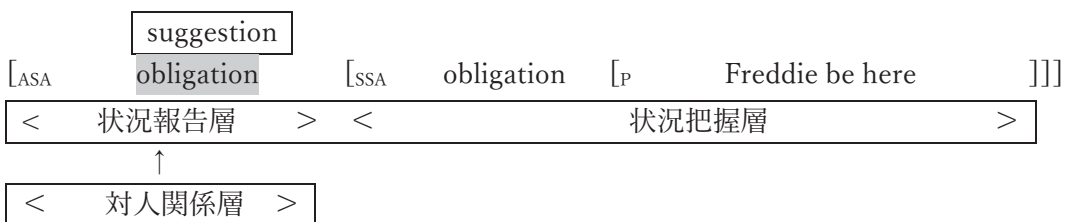
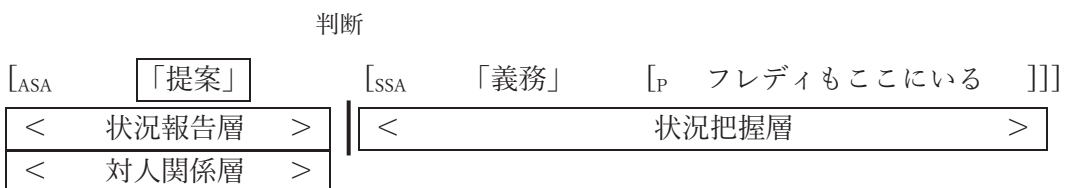


図6：should の分析例 (16)

例文1：“If we make plans,” Michael said. “Freddie should be here.” (M. Puzo, *The Godfather*, p. 97)
[suggestion]



例文2：「計画を立てるのなら」マイケルが口をはさんだ。「フレディもいたほうがいいんじゃないかな」
([『ゴッドファーザー』 p.104 [提案])



しかし、「彼はうれしいらしい」のように推測していることを公的自己の立場からことばを補って報告すれば、自然な表現になる。いっぽう英語では、状況把握層と状況報告層が一体化し、直示的中心である公的自己の立場から状況を捉えて報告するしくみになっているので、主語の人称に関係なく、聞き手に自然に伝達することができる。

このモデルに沿って考えると、日本語と異なるドイツ語の言語現象の1つ「ひとり言の du」が分かりやすく説明できる。日本語でひとり言を言う場合には、主語を言わないか、「わたし／ぼく」などの表現を使うのが一般的であるが、ドイツ語では親称の2人称 du で自分自身に呼びかけることが多い。日本語では図2のように、私的自己が状況把握をして話していることが想定できるが、ドイツ語では英語と同じく、図1の状況報告層の直示的中心の話者が、私的自己に話しかけていると考えれば、納得がいく。

「公的自己」と「私的自己」への分割や、言語化プロセスに3つの層を想定することが、「言語使用の三層モデル」の特徴であるが、それに加えて、直示の中心のありかを示す点が、ラネカーの認知モデルにはない特徴である。

3. 英語の話法の助動詞の分析例

話法の助動詞を含む文は、一般的な命題部分に加え、話者の命題に対する判断や心的態度が加わり、意味構造が複雑になる。ここでは、和田尚明(2017)の must および should を含む英語文とそれに対応する日本語文の分析例を見る。話法の助動詞を含む文を、命題内容と心的態度に分け、それを言語使用の三層モデルと重ね合わせた「融合モデル」として表し、分析の基盤としている。図3と図4⁽⁹⁾が、それぞれ英語文と日本語文に対応したモデルである。和田は、言語使用の三層モデルを利用することによって、「心的態度としてのモダリティを表す法助動詞を含む文が、間接発話行為⁽¹⁰⁾の生じやすさに関して、日英語で異なる振る舞いをするのはなぜかを説明できる⁽¹¹⁾」としている。

図3と図4では、長方形の枠の中に「状況把握層」「状況報告層」「対人関係層」の三層が、それぞれ英語と日本語で異なる組み合わせで設定される。英語版では、「状況把握層」と「状況報告層」が一体のものとして同じ枠の中に置かれている。そして、「対人関係層」がその外から働きかけている。いっぽう日本語版では、「状況把握層」が独立している。「状況報告層」と「対

人関係層」はびったり重なり、「原則として、状況報告・伝達を行うさいに対人関係を考慮しない言語使用は認められないことを示唆している⁽¹²⁾」とのことである。

分析される例文は、角カッコで囲まれた部分で示され、入れ子構造で表現される。一般的な意味の階層構造である。文内容の主要部分である命題内容は [P]、命題内容に対する話者の心的態度は [SSA]、聞き手に対する話者の心的態度は [ASA] と表現される。それぞれの省略記号の意味は、図4の下に示した。

日英語の融合モデルの違いを元に、和田は、文発話の基本単位について次のような仮説を提案している。

状況報告層と状況把握層が一体化している英語の文発話の基本単位は、対人心的態度・対事心的態度・命題内容のすべてで構成される「状況報告」モードを表すが、状況把握層が状況報告層から独立している日本語の文発話の基本単位は、対事心的態度と命題内容で構成される「状況把握」モードを表す。⁽¹³⁾

言語使用の三層モデルでは、英語の一体化した状況報告層・状況把握層には話者の公的・私的自己が関わるが、日本語の独立した状況把握層に関わるのは話者の私的自己のみである。明記はされていないが、和田の「基本単位」という表現の中に、廣瀬の「直示の中心」が意識されていると思われる。

3.1 must の分析例

和田(2017)より、must を含む文の分析例の一部を引用する⁽¹⁴⁾。

- (9) You must only do it with your teacher, because you can so easily get into the wrong [advice]
- (10) (あなたは) 先生と一緒にのときだけそれをしななければならない。
- (11) (あなたは) 先生と一緒にのときだけそれをするのがいい。

(9) は must を含む英語文、(10) はそれに対応する直訳の日本語文、(11) は意識の日本語文である。そして、それを融合モデルに当てはめて図式化したものが、図5の3つの融合モデル⁽¹⁵⁾である。

must は強い「義務・必然」を表す話法の助動詞であるが、場面によっては「助言」「要求」など、さま

ざまな発話意図を表すために使われる。英語文(9)は、mustを使用した「助言(advice)」の例として挙げられている。

英語文(9)は、状況把握層と状況報告層が一体化しており、直示的中心は状況報告層にある。和田の仮説の表現を借りれば、「状況報告」モードである。発話の段階で、命題内容とともに対事心的態度でも聞き手に対する「義務」であることが意識され、それがそのまま言語化される。しかし、その内容は聞き手のためを思っていることで、聞き手にとって良い内容であるため、そこに「助言」という「間接発話行為」が生じるというのが、この図式の表すところである。状況報告層に書かれたobligationは影付き、adviceは枠付きである。影付きは「背景化」を、枠付きは「前景化」した心的態度を表現している。

日本語文(10)と(11)では、状況把握層が独立しており、直示的中心もそこにある。しかし、報告する場合には、状況報告層と対人関係層で、聞き手との社会的・心理的關係を考慮したうえで発話意図が判断され、表現が選択される。(10)では「強い義務」として報告する再判断が行われ、「～なければならない」という表現が選択される。(11)では聞き手のためを思った「助言」という判断が行われ、「～のがいい」という表現が選択される。日本語では、発話意図と言語表現が寄り添っているため、英語のような「間接発話行為」が生じにくい。

3.2 shouldの分析例

意味的に近いshouldを含む英語文とその融合モデル(図6)の例⁽¹⁶⁾も引用する。本稿第4節でドイツ語sollteの例を扱うので、良い比較対象となるからである。強い義務を表すmustに対し、shouldは弱い義務のモダリティを表すが、ここでは「提案(suggestion)」と解釈される例が挙げられている。

(12) "If we make plans," Michael said, "Freddie should be here." (M. Puzo, *The Godfather*, p. 97)

(13) 「計画を立てるのなら」マイケルが口を挟んだ。「フレディーもいたほうがいいんじゃないかな」(『ゴッドファーザー』p. 104)

英語文は、状況把握層と状況報告層が一体化した「状況報告」モードで発話が行われる。例文(12)の弱い義務の表現should「～べきだ」から、聞き手は「提案」という間接発話行為を感じ取ることができる。

obligationが背景化し、suggestionが前景化する。いっぽう日本語文では、聞き手に伝達するときに、状況報告層と対人関係層が一体化した「状況報告」モードに変更して言語化しなければならないので、「提案」にふさわしい表現「～ほうがいい」が選択される。

和田(2017)の融合モデルでは、例文がすべて英語文とその日本語訳である。翻訳文はどうしても解釈的・説明的になりがちな点に留意しなければならない。しかし、挙げられているのは日常的表現であり、「1つの状況を英語・日本語でそれぞれどのように表現するか」という発想から読むことも可能であろう。

3.3 英語・日本語比較のまとめ

欧米言語の語法の助動詞は、文脈によってさまざまな解釈が可能である。それが多義なのか、それとも1つの中核的な意味に集約されるのかは、意見の分かれるところである。

和田(2017)の三層モデルを利用した融合モデルでは、英語のmustやshouldが持つ中核的意味obligationは、状況把握層の対事心的態度で把握され、一体化した状況報告層の対人心的態度でも同様に把握される。そして、聞き手への伝達が「状況報告」モードで行われるときに、話者の発話意図が聞き手によって間接発話行為として感じ取られる。語法の助動詞のさまざまな意味用法を、中核的意味から解釈によって生じた「間接発話行為」と捉える点が興味深い。いっぽう日本語では、状況把握層で捉えられた内容を「状況報告」モードで聞き手に伝えなければならず、ここでは状況報告層と対人関係層が一体となった層で、聞き手との社会的・心理的關係に配慮しながらふさわしい言語表現が選択される。発話意図がそのまま言語表現に反映されるので間接発話行為が想定されにくい。英語の語法の助動詞と、日本語の語法の助動詞に準ずる表現を比べると、英語のほうがより抽象的、日本語のほうがより具体的ということであろうか。

ただ、言語使用の三層モデルにあった「直示的中心」について触れられていなかったのが残念である。英語の状況把握と状況報告が一体となった層では、常に公的自己が優先しているであろうか。私的自己と公的自己との距離については述べられていなかった。

4. ドイツ語・オランダ語への応用の試み

ドイツ語・オランダ語・英語は、同じ西ゲルマン語系に属する兄弟言語である。そのため、言語使用の三層モデル、および融合モデルの応用の可能性を探るに

は、英語版が基本になる。しかし、日本語版のモデルから得られた示唆も有益である。言語の認知的な類型へとつながる可能性があるからである。

第4節では、言語使用の三層モデルとその融合モデルを使い、「義務・必然」のモダリティを表す話法の助動詞、ドイツ語の *müssen* とオランダ語の *moeten* の比較を試みる。具体的な例文を取り上げる前に、これまでの対照研究で *müssen* と *moeten* に関して分かっていることを簡単にまとめる。

①ドイツ語・オランダ語間の翻訳では、ほとんどの *müssen* がオランダ語訳で *moeten* に置き換えられ、4分の3以上の *moeten* がドイツ語訳で *müssen* に置き換えられていた⁽¹⁷⁾。翻訳のさいにも大部分が相互に訳すことができる対をなす語彙である。

②オランダ語 *moeten* は、ドイツ語 *müssen* よりも広い意味範囲をカバーしている。たとえば、ドイツ語の *sollen* の接続法Ⅱ式 *sollte* は、1人称から2人称への助言「～ほうがいい」に使われることがあるが、オランダ語では同じ内容がしばしば *moeten* で表現されることが知られている。この *moeten* は少し弱めの必然性を表し、親しい関係で用いられることが多い。⁽¹⁸⁾

③オランダ語 *moeten* は、しばしばドイツ語 *wollen* で訳されることがある。*wollen* が *moeten* で訳されることもある。主語の強い意志を表す。⁽¹⁹⁾

④日本語で「(泣か) ずにはいられない」というような、やむを得ない状態を表現するときに、オランダ語 *moeten* よりもドイツ語 *müssen* のほうがよく使われる傾向がある。⁽²⁰⁾

まとめると、「義務・必然」の話法の助動詞 *müssen* と *moeten* は大部分の場面で同じ意味で使用可能だが、*moeten* のほうが少しソフトな意味合いで使えたり、ドイツ語の *wollen* のような意志的な意味にも使えるなど、カバーする意味範囲が広い。いっぽう、*müssen* のほうがよく使われる必然性に、「意志でコントロールできない(感情・生理現象など)」状況の表現がある。

本稿では、*müssen* と *moeten* が相互に翻訳で利用できる同義の用法ではなく、意味が重ならない②と③の例を分析対象とする。また、話法の助動詞を含む文の意味解釈には、話者、聞き手、文主語など多くの関与者の主観が関係するが、言語使用の三層モデルは主に話者の視点が言語表現に与える影響をテーマにしていることから、話者の視点に焦点を絞って分析を進めることとする。

4.1 *sollte* と *moeten* の例文の比較

ドイツ語の *sollte* とオランダ語の *moeten* が対応関係にある「助言・アドバイス」の場面の発話を例に挙げる。同じ発話意図で、ドイツ語 *müssen* の接続法Ⅱ式 *müsste* もまた *moeten* に置き換えて訳されることも多いので、その例も挙げる。いずれもドイツ語からオランダ語への翻訳である。対応するモデルは図7と図8である。(14c) と (15c) は、日本で出版されている邦訳書より引用した該当箇所の日本語訳である。

(14a) Du *solltest* dieses Recht nicht missbrauchen!⁽²¹⁾

(14b) Je *moet* dat recht niet misbruiken.⁽²²⁾

(14c) そういう権利はやたらと使うものではないよ。⁽²³⁾

(15a) Du *müsstest* eben einmal irgendwas tun, was ihnen Respekt einjagt.⁽²⁴⁾

(15b) Nou, dan *moet* je eens iets doen, waardoor ze respect voor je krijgen.⁽²⁵⁾

(15c) そうか、じゃあ、おまえはなにかをやらかすべきだな。みんなをあっと言わせるようななにかをさ。⁽²⁶⁾

ドイツ語の *sollen* は、*müssen* と同じく必然性を表現するが、異なる点はそのモダリティ源が主語外にある (extrasubjektiv) という特徴である。そして、モダリティ源は、しばしば人の要求で、「主語外の意志」とも呼ばれる。接続法Ⅱ式 *sollte* は、主語外の要求が少し柔らかに表現されており、「助言・アドバイス」の定番の表現と言える。例文(14a～c)の話者は教師、聞き手は生徒である。

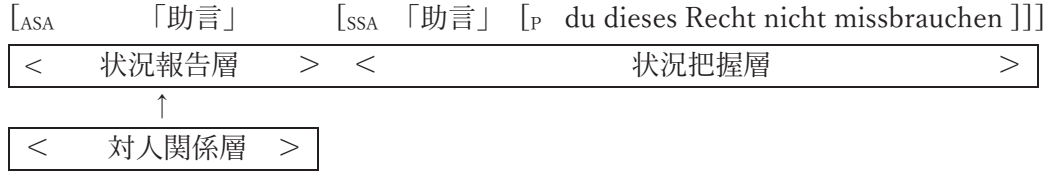
このように *sollte* は「助言」の言い回しとして決まった表現と判断できるので、図7の例文(14a)の図式化では、状況把握層の対事心的態度を「助言」と記した。状況報告層でも、特に意味の前景と背景を考える必要もないため、対人心的態度も「助言」のままである。

いっぽうオランダ語の例文(14b)では *moeten* が使われているので、対事心的態度としてはまず「必然」を挙げた。そして、状況報告層では、その場面の人間関係などが考慮され、「必然」が背景化し、「助言」という間接発話行為が前景化する。

例文(15a)は、クラスメート同士の会話である。一人がみんなから弱虫だと思われていることに悩んでいると打ち明けると、その友人があるアイデアを出すという場面である。「アドバイス」にも似ているが、ここではアイデアの1つを話してみたということ

図7: sollte と moeten の分析例

例文 (14a) : Du *solltest* dieses Recht nicht missbrauchen! [助言]



例文 (14b) : Je *moet* dat recht niet misbruiken. [助言]

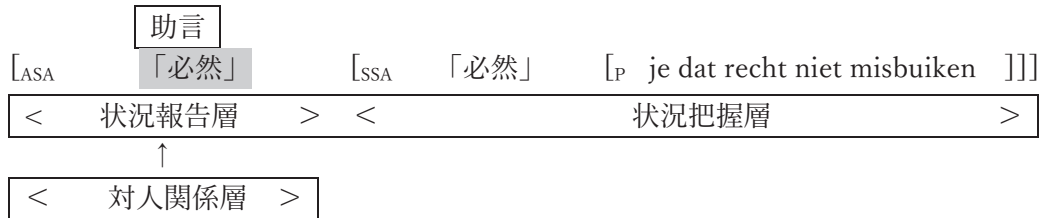
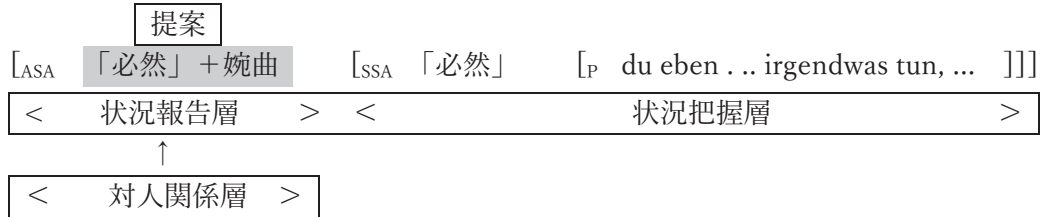
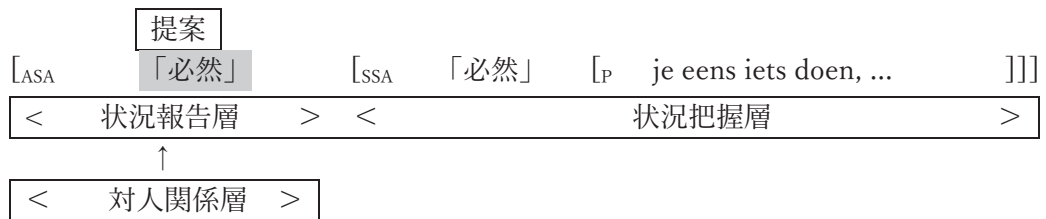


図8: müsste と moeten の分析例

例文 (15a) : Na, du *müsstest* eben einmal irgendwas tun, was ihnen Respekt einjagt, ... [提案]



例文 (15b) : „Nou, dan *moet* je eens iets doen, waardoor ze respect voor je krijgen, ” ... [提案]



で、「提案」とした。müssen の接続法Ⅱ式が使われている。少しニュアンスを和らげる婉曲の用法である。そこで図8では、対事心的態度では必然性を意識したものの、報告する段階では、人間関係にも配慮し、「必

然」の婉曲表現から「提案」が間接発話行為として前景化するという形で図式化した。

例文 (15b) では、moeten が使われているので、(14b) と同じく、対事心的態度としては「必然」が意識され

図9：wollen と moeten の分析例(1)

例文 (16a) : Wir *wollen* das Stück von Johnny Trotz weiter probieren. [意志]

[_{ASA} 「意志」 [_{SSA} 「意志」 [_P wir das Stück ... probieren]]]

< 状況報告層 > < 状況把握層 >

↑

< 対人関係層 >

例文 (16b) : We *moeten* het stuk van Johnnie Trotz verder repeteren. [意志]

意志

[_{ASA} 「必然」 [_{SSA} 「必然」 [_P we het stuk ... repeteren]]]

< 状況報告層 > < 状況把握層 >

↑

< 対人関係層 >

図10：wollen と moeten の分析例(2)

例文 (17a) : Hexe Nesschi, ... was *willst* du haben für sieben Brunnen voll Bier? [意志]

[_{ASA} 「意志」 [_{SSA} 「意志」 [_P was du haben für ... Bier]]]

< 状況報告層 > < 状況把握層 >

↑

< 対人関係層 >

例文 (17b) : Heks Neschi, ... wat *moet* je hebben voor zeven bronne bier? [意志]

意志

[_{ASA} 「必然」 [_{SSA} 「必然」 [_P wat je hebben voor ... bier]]]

< 状況報告層 > < 状況把握層 >

↑

< 対人関係層 >

る。しかし、報告の段階では、友人との社会的・心理的関係を踏まえ、特に婉曲のようなニュアンスを和らげる文法要素はないが、「提案」という間接発話行為として聞き手に解釈される。このような形で図式化を

行った。

オランダ語のほうがドイツ語よりも、言語表現から伝達される情報は少なく、意味を制限する要素もなく、理解は聞き手の解釈に任されている印象である。

4.2 wollen と moeten の例文の比較

ドイツ語の *wollen* は主語の意志を表す。オランダ語にも同語源の *willen* という語法の助動詞があるが、「願望」の意味でもよく使われるためか、実行を伴う明確な意志を表す場合、しばしば *moeten* が使われる。そのため、翻訳でも双方向でしばしば訳語として使われる。ここでは、ドイツ語からオランダ語への翻訳例 (16a, b) と、オランダ語からドイツ語への翻訳例 (17a, b) を例文として挙げる。該当する日本語訳 (16c)、(17c) は、日本で出版されている邦訳書からの引用である。

- (16a) Wir *wollen* das Stück von Johnny Trotz weiter probieren.⁽²⁷⁾
 (16b) We *moeten* het stuk van Johnnie Trotz verder repeteren.⁽²⁸⁾
 (16c) ぼくら、ジョニー・トロツの芝居のけいこをしたいんです。⁽²⁹⁾
 (17a) Hexe Nesschi, ... was *willst* du haben für sieben Brunnen voll Bier?⁽³⁰⁾
 (17b) Heks Neschi, ... wat *moet* je hebben voor zeven bronnen bier?⁽³¹⁾
 (17c) 魔女ネシよ、七つの泉全部のビールを飲むには、なにを支払ったらよいのだ?⁽³²⁾

例文 (16a) の発話の場面は学校である。ダンスの練習をする上級生たちがなかなか練習場を決まりどおりに空けてくれないので、勇気を出して苦情を言う。図9が融合モデルによる図式化である。*wollen* は明らかに意志を表す語法の助動詞なので、対事心的態度は「意志」である。そして、対人心的態度も、上級生に対する意志表示と解釈できるので、「意志」のままとした。

例文 (16b) では、*moeten* が使われるので、対事心的態度としては「必然」である。どうしても稽古をしなければならぬ、他の選択肢はないという気持ちであろう。報告の段階では、上級生との人間関係・力関係・社会的ルールなどを総合的に考慮し、まずは明確な意志表示をする。「必然」が背景化し、間接発話行為としての「意志」が前景化する。

例文 (17a) は、(17b) のドイツ語訳である。場面は、お酒好きのドラゴンが、魔女に、何と引き換えなら7つの泉のビールを自分のものにできるか尋ねている。(17b) では *moeten* が使われているので、対事心的態度は「必然」である。そして、報告は、魔女の「意

志」を確認するための質問となる。必然性を伴う答えを決めるのは魔女の「意志」である。

例文 (17a) では、意志を表す語法の助動詞 *wollen* が使われている。(16a) と同じく、対事心的態度も対人心的態度も「意志」となる。

wollen と *moeten* の組み合わせでは、翻訳の方向にかかわらず、同じ結果となった。

4.3 分析のまとめと評価

müssen と *moeten* の意味範囲は大部分が重なっている。その周辺領域の異なるニュアンスで使用されるケースのみを取り上げて分析した。言語使用の三層モデルを取り込んだ融合モデルを使うことによって、明示できたことの1つは、「オランダ語 *moeten* を含む文は間接発話行為を生じさせやすい」ということである。ドイツ語で「助言」の *sollte* や「意志」の *wollen* を使用する場面でも、オランダ語では *moeten* を使い、場面の状況や人間関係によって、話者の発話意図を聞き手が解釈することが想定されている。*moeten* のほうが *müssen* に比べてより広い意味範囲で使用されること、そして意味解釈に状況や人間関係がより多く関わっていることを、視覚的に示すことができた。

もう1つ確認できたこととして、*moeten* のほうが *müssen* よりも話者の意志や気持ちをより多く含んでいるという点が挙げられる。「必然」が、話者の聞き手への思いを含む「助言」や「提案」と解釈されたり、ドイツ語の *wollen* にも相当する強い「意志」の表現と同等に解釈されることが、図式化によって分かりやすく示された。

moeten のほうが間接発話行為を生じさせやすい点を考えると、ドイツ語よりもオランダ語のほうが、「対人関係層」がより密接に「状況報告層」に影響を与えている印象である。日本語のように一体化しているわけではないし、また状況把握層が独立しているわけでもない。また、より多くの話者の意志や気持ちが *moeten* によって伝えられる点では、三層モデルの直示的中心の位置が、ドイツ語よりも少し「私的自己」に近いという可能性はないだろうか。

今回図式化に取り上げなかった「～せずにはいられない」という意味の *müssen* と *moeten* であるが、両語とも「必然」を意味するので、このような「不可避」の意味でも使うことができる。しかし、実際に翻訳を比較してみると、ドイツ語では決まったように *müssen* が使われるのに対し、オランダ語ではそれほど頻繁には使われない。*moeten* が話者の主観をより

多く表現するため、「自らの意志でコントロールできない」という意味での必然性を表現しにくいのだと思われる。

それらを考え合わせると、図1の三層モデル英語版で、ドイツ語もオランダ語も説明はつくが、両言語の違いを考えると、一体化した状況把握と状況報告の層の中で直示の中心がどこにあるのかが、両言語を区別する1つのポイントになる可能性がある。

5. 今後の課題と展望

話法の助動詞からは離れるが、ドイツ語とオランダ語には次のような違いもある。疑問詞「誰が」の文法上の数の問題である。ドイツ語 *wer* は常に3人称単数として扱われる⁽³³⁾が、オランダ語 *wie* は状況に応じて使い分けられる。基本的には3人称単数扱いであるが、複数の人々の関与が明らかな場合は、続く動詞の人称変化は3人称複数になる⁽³⁴⁾。

この文法現象は、オランダ語がドイツ語よりも発話状況から受ける影響が強いことの現れで、「一体化した状況把握・状況報告層と、対人関係層との距離は、オランダ語のほうが近い」という今回の結果と重なる。同じ「状況報告」モードで情報伝達を行うドイツ語とオランダ語でも、状況把握・状況報告層と、対人関係層との間の相互作用は、オランダ語のほうが強いという可能性が高まった。

もう1つの考察対象として、「公的自己」と「私的自己」が、完全に切り離して考えられるのかという疑問がある。英語版の一体化した状況把握・状況報告層には公的・私的自己の両方が含まれ、英語の場合の直示の中心は「公的自己」とされている。英語・日本語比較の場合には、英語は公的自己中心の言語、日本語は私的自己中心の言語という表現で区別できるのかもしれない。しかし、ドイツ語 *müssen* とオランダ語 *moeten* を比べると、*moeten* のほうがより多く話者の心的態度を伝達している可能性が、間接発話行為の生じやすさからもうかがえる。公的自己と私的自己の間にグラデーションのような段階があれば、異なる言語間の認知的な類型化につながるのではないだろうか。

ラネカーの認知モデルから始まり、日本語の認知特性と向き合った結果、中村芳久(2016)は、話者の認知にIモードとDモードを区別することを提案している⁽³⁵⁾。Iモードは状況内視点で、観る側の話者・聞き手と観られる側の対象が相互に作用しながら認知像を作る。いっぽうDモードは状況外視点で、Iモード認知をメタ的に外から眺めている。Dモードは「公

的自己」に重なる。Iモードは「私的自己」に重なって見える。中村はさらに、「おそらくヒトは、後者(Dモード)の認知様式を進化させているということであり、言語や言語表現によっては、前者(Iモード)の認知様式を多めにとどめている⁽³⁶⁾」と述べている。認知的な言語の類型化への示唆と思われる。「言語の認知的類型」という目標を目指しつつ、さらにドイツ語とオランダ語の比較研究を深めたい。

この研究は2020年度国立音楽大学個人研究費(特別支給)の助成を受けた。

註

- (1) Hirose, Yukio (2015); 廣瀬幸生 (2016, 2017)
- (2) 典型的な例としては、日本語で主語が明示されない文が多いことなど。
- (3) Suematsu, Yoshimi (2019)
- (4) 末松淑美 (2020: 74)
- (5) 廣瀬 (2016: 338; 2017: 2 など)
- (6) 廣瀬 (2016: 337-338; 2017: 3)
- (7) 廣瀬 (2017: 13-14)
- (8) 廣瀬 (2016: 9-11) の例文と説明を非常に短縮した形で引用している。
- (9) 和田尚明 (2017: 58)
- (10) 間接発話行為 (indirect speech act) はジョン・R・サールのことばで、発話の文字通りの意味とは異なる発話意図のことである。
- (11) 和田 (2017: 44)
- (12) 和田 (2017: 59)
- (13) 和田 (2017: 59)
- (14) 和田 (2017: 61) には、「強い義務 (strong obligation) のモダリティ」を表す *must* の例文が3つ挙げられている。英語文はすべて Collins, Peter (2009: 35) *Modals and Quasi-modals in English*, Rodopi, Amsterdam. からの再掲載とのことである。ここでは説明のために、その中の1文のみを取り上げる。
- (15) 和田 (2017: 61-62)。3つ目の意識の日本語文(11)に関しては、融合モデルに当てはめた図式が掲載されていなかった。そのため、記述に基づき、筆者が同モデルに当てはめて図式化したものである。
- (16) 和田 (2017: 64)
- (17) Suematsu (2019: 50) の Tabelle 2 のデータが示すように、ドイツ語からオランダ語への翻訳では、

müssen を含む85例文のうち83が moeten で訳されていた。オランダ語からドイツ語への翻訳では、moeten を含む123例文のうち94が müssen を使って訳されていた。

- (18) Mortelmans, Tanja (2000: 45); Suematsu (2019: 52) など。
- (19) Suematsu (2019: 55-56)
- (20) Suematsu (2019: 56-58)
- (21) Kästner, Erich (1935: 75) *Das fliegende Klassenzimmer*, Atrium Verlag.
- (22) Kästner, Erich (1988: 55) *De vliegende klas*, Uitgeverij BZZT6H. Vertaling: Wim Hora Adema.
- (23) エーリヒ・ケストナー (2006: 105) 『飛ぶ教室』池田香代子訳、岩波書店。
- (24) Kästner (1935: 42)
- (25) Kästner (1988: 30)
- (26) ケストナー (2006: 56)
- (27) Kästner (1935: 27)
- (28) Kästner (1988: 18)
- (29) ケストナー (2006: 33)
- (30) Biegel, Paul (2012: 80) *Eine Geschichte für den König*, Urachhaus. Übers. v. Lotte Schaukel.
- (31) Biegel, Paul (1964: 84) *Het sleutelkruid*, Lemniscaat.
- (32) パウル・ビーヘル (2012: 169) 『ネジマキ草と銅の城』野坂悦子訳、福音館書店。
- (33) Duden Band 4 (2016: 306) *Die Grammatik*. 2.9.2, (i): „Die Form *wer* und ihre Kasusformen haben die feste Merkmalkombination Maskulinum Singular.“
- (34) Algemene Nederlandse Spraakkunst 電子版 E-ANS, 5.7.4.1 *Het gebruik van wie*: „... wanneer het duidelijk is dat er meer personen in het geding zijn, is ook een meervoudige persoonsvorm mogelijk. (複数人間が状況に関与していることが明らかな場合は、複数人称形も可能)
- (35) 中村芳久 (2016: 30-49)
- (36) 中村 (2016: 34) 引用文中のカッコ内表記は本稿筆者による。
- カーの(間)主観性とその展開』中村芳久・上原聡(編)、333-355、開拓社。
- 廣瀬幸生 (2017) 「自分の言語学 - 言語使用の三層モデルに向けて -」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子(編)、2-24、開拓社。
- Langacker, Ronald W. (2008) : *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, New York. [邦訳: ロナルド・W・ラネカー (2011) 『認知文法論序説』山梨正明監訳、研究社]
- Mortelmans, Tanja (2000) : Eine kontrastive Analyse der niederländischen und deutschen Modalverben am Beispiel des niederländischen Verbs *moeten*. In: *Germanische Mitteilungen* 52, 33-60. Belgischer Germanisten- und Deutschlehrerverband.
- Mortelmans, Tanja (2010) : Falsche Freunde: Warum sich die Modalverben *must*, *müssen* und *moeten* nicht entsprechen. In: *Modalität / Temporalität in kontrastiver und typologischer Sicht*. Danziger Beiträge zur Germanistik, Band 30, 133-148.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」『認知文法論Ⅱ』中村芳久(編)、第1章、シリーズ認知言語学入門第5巻、3-51、大修館書店。
- 中村芳久 (2016) 「Langackerの視点構図と(間)主観性 - 認知文法の記述力とその拡張 -」『ラネカーの(間)主観性とその展開』中村芳久・上原聡(編)、1-51、開拓社。
- 末松淑美 (2019) : 「ドイツ語 *müssen*, *sollen* とオランダ語 *moeten* における意志的意味の比較」『国立音楽大学研究紀要第53集』、45-56。
- Suematsu, Yoshimi (2019) *Notwendigkeit und Volitivität: Ein semantischer Vergleich zwischen dt. müssen und nl. moeten*. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*, Band 18 / Heft 1, 42-61, indicium.
- 末松淑美 (2020) 「Langackerの認知モデルにおける主語および話者の意志」『国立音楽大学研究紀要第54集』、67-77。
- 和田尚明 (2017) 「言語使用の三層モデルと時制・モダリティ・心的態度」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子(編)、44-68、開拓社。

参考文献

- Hirose, Yukio (2015) "An Overview of the Three-Tier Model of Language Use". In: *English Linguistics* 32 (1), 120-138.
- 廣瀬幸生 (2016) 「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネ